美容室の大きな鏡に映る私の顔を、じっと見つめる。三十九歳。目尻には確かに小皺が刻まれ、頬のたるみも隠せない。でも今日の私は、いつもと違う表情をしている。
「もしよかったら一緒に行きません？」
シザーの小気味よいカット音に隠れるくらいの小さな声で、武本さんが尋ねた。ミラー越しに見るその顔は明らかに照れている。もちろん私の頬も、どうしようもなく赤く染まっていた。
「え、本当かや？」
動揺のあまり声が上擦る。無理もない。男性から食事に誘われるなんて実に二十年ぶりなのだ。どんなリアクションをとるのが正解かすら、もう分からない。
「はい、ぜひぜひ。それじゃ、明日のお昼とかどうです？」
サイドの毛先を小気味よく整えながら、時折鏡でアウトラインを確かめる。その度に視線が合ってしまう。この胸の高鳴りは何なのだろう。カットに影響しないよう、震えを抑えるのに必死だった。
こうして鏡の中の自分と向き合うと、年齢を痛感する。三十九歳。にやけると目尻の皺が目立つ。頬のたるみ、肌のシミ。気になり出すときりがない。ケアなんてやってる余裕もないくらいに仕事と子育てに費やした私のこの十年。よく言う『女手一つ』で、息子を何とか東京の大学まで行かせ、やっと手に入れた私の時間。三十代ラスト、まさかこんな出逢いが訪れるなんて思ってもみなかった。
この美容室に通い始めて半年になる。ネット予約サイトで初回割引クーポンが使えるという他愛もない動機。今考えるとそれも運命の導きだったのかもしれない。たまたま担当についてくれた武本さんとは不思議なくらい話が合った。通っていた小学校・中学校が同じ。よく見るテレビ番組も、好きなタレントも同じ。そして料理の好みもよく似ていた。
私がカニクリームコロッケが好きだと話したら、佐屋街道沿いにある洋食屋のランチが美味しいと教えてくれた。女性客が多く一人ではなかなか行きづらいので、と理由づけもあったが、二回りも年の離れたおばさん客を普通なら誘わないだろう。これは脈があると思っていいのだろうか。独身だとは伝えたが、大学生の息子がいることは言っていない。話した方がいいのか、別に言わなくてもいいことなのか。そもそもこの気持ちは何なのか。頭の中で問答が続いた。
「明日は暇だでええですよ」
お昼を一緒に食べるだけ、そう自分に言い聞かせて難しく考えることをやめた。
待ち合わせの三十分前。東公園駐車場に到着すると、ブルーメタリックのハイブリッドカーがすでに私を待っていた。パワーウインドーを下ろし爽やかな笑顔で手を振る武本さん。
「すいません、お待たせしてしまって」
「あ、気にせんでええがや。何か待ちきれんくて」
彼のエスコートで助手席のレザークッションに身を沈めた。ネイビーのテーラードジャケットを纏った武本さんは無駄のない動きで車を発進させる。現在二十七歳。私と同じ巳年、

つまり十二歳違いだ。それなのに終始落ち着いた会話で私をリードし、どっちが年上なのか分からなくなる。私に合わせてくれているのか、スピーカーから流れてくるのは九十年代の懐かしい洋楽の数々。ふと別れた旦那との初デートを思い出す。あの時カーラジオから流れていたのもこの曲だったっけ。そんなほろ苦い思い出が脳裏に過るが、もちろん武本さんには口にできない。
日光川沿いの県道五一六号線を右折して佐屋街道に入り、走ること五分。メルヘンな童話に出てきそうな白壁の外観が見えたところでウインカーを出し、武本さんは車を停めた。『洋食工房』の看板。左右に灯るアンティーク調のウォールライトに出迎えられて店のドアを開くと、日曜日の昼時ということもあってか家族連れで賑わっていた。美味しそうにハンバーグを頬張る小さな男の子。楽しそうに話しかける父親と母親。十年前までは幾度となく経験してきたシチュエーションだ。なんだかとても懐かしい。
「予約した武本です。ちょっと早ゃあけどええかな？」
店員は愛想よく返事をし、私たちを一番奥のテーブル席へと案内した。木目の美しい席に座り、武本さんと向かい合う。窓からは柔らかな晩秋の陽射しが降り注いでいる。これは夢なのか。緊張をほぐすため彼に見えないように左手の甲をギュッとつねってみた。痛い、夢ではない。
店内の黒板でメニューを確認する。ハンバーグランチ、海老フライランチ、牛肉サイコロステーキランチにカキフライランチ。どれも美味しそうで目移りしてしまうが、初志貫徹で私はカニクリームコロッケランチをオーダーする。武本さんはハヤシライスランチをセレクトし、全メニュー制覇にリーチをかけると少年のように目を輝かせて笑った。
先週観た映画の話で盛り上がっていると、店員が料理を運んできた。揚げたてのコロッケや湯気立ち込めるハヤシライスがテーブルの上に並べられる。上品な油の香りが鼻孔を擽る。準備が整ったのを確認した私たちは両手を合わせた後、ナイフとフォークを手にした。
口に入れるとサクサクした衣の食感の後で濃厚なクリームがふわっと広がる。
「いやあ、津島でこんなに美味しいコロッケ食べられるお店あったなんて。夢みたいだに」
咄嗟に口をついた言葉に嘘はない。正しくは『憧れの武本さんと』一緒に食べられることが夢みたいだと言いたかった。
「喜んでもらえて良かったです。僕も白岡さんと食事できて何だか嬉しいな」
隣りのテーブルの子供の泣き声で聞き取りづらかったが、口の動きは確かにそう言っていた。こういう話になると彼は小声だ。そして私はまたどう反応していいのか分からず、ただひたすらコロッケとライスを頬張るだけ。こんな時、三十秒の沈黙も長く感じる。まずい、何か喋らなければ。
「あの。思い切って聞きますが、こんな年が離れている私なんかでいいんですか？」
完全に勢い任せだった。言ってしまった、とも思ったが後悔はしない。ずっと聞きたかったことだからだ。どんな風に返してくれるのだろう。色んなパターンを瞬時に考えてみた。社交辞令も、ごまかしも謙虚に受け止めるつもりだった。もちろん自惚れで終わるケースだっ

てあっただろう。しかし彼の返事はシンプルだった。
「会うんですよ。フィーリングが。一緒にいると楽しい、僕は。…白岡さんはどうですか？」
直球ど真ん中。見事なまでの剛速球ストライクコース。見逃すか、打ち返すか。
「もちろん、楽しいに決まってるじゃないですか！」
思いっきりバットを振ってみた。球は美しい放物線の軌道を描きぐんぐんと伸びていく。入るか、入るか、どうだ。
「良かった。僕、実は誘うのもドキドキだったんですよ」
眩しすぎて直視できないくらいのスマイルで彼は私をじっと見た。どうやらホームランのようだった。
人生地道に頑張ればいつか報われる。そんな幸せに浸っている時だった。ハンドバッグの中でスマートフォンが大きく振動していることに気がついた。特にここ最近は日曜日に鳴ることなんてほとんどない。全く心当たりもないまま着信画面を確認した。
『悠貴』、ディスプレイには確かにそう表示されている。こっちから電話をかけてもほぼ出ない放蕩息子が何故このタイミングで。一体何の用事なのか。気になる、とても気になる。武本さんは『構わず通話してください』と掌で合図を送ってくれている。でも出れる訳がない。今はお母さんモードに戻れないし、戻りたくはない。「また後でかければいい」、一瞬の躊躇のあと反射的に終話ボタンを押してしまった。
結局そのあと、私は掛け直すことをしなかった。話に夢中になりすぎて忘れてしまったからに他ならない。食事の後、東公園に戻った私たちは児童科学館のプラネタリウムを鑑賞した。気がついたら二人手を繋いでいた。こういうのをデートと呼ぶのだろう。十九歳で悠貴を身籠り、儚くも終わってしまった私の青春。二十年の歳月を経てようやく続きが始まろうとしている、そう思った。
午後十時。デートの余韻に浸りながらアパートに戻ると部屋の電気が点いていた。出掛ける前に確かに消したはず。私は慌ててドアを開けた。玄関には見慣れない男性用のスニーカー。奥から「お帰り」という低い声が聞こえてくる。悠貴が何故かソファーに座っていた。
「ちょっと何ぃ、あんた。どうして居るん？」
おでんと缶チューハイの入ったコンビニ袋をテーブルに置き、息子の隣りに座る。大学の入学式以来、半年ぶりの再会。髪は茶色に染まり、耳にはピアス。想像はしていたが随分と垢抜けたものだ。
「母さんこそこんな遅ぉまでどこ行っとったの？　化粧までして」
そうだった。今までよほどの用事でもない限り日曜日こんな時間まで出掛けることはなかった。ましてやレースのトップスにフレアスカート、首にはネックレス。デートスタイルなのは明らかだ。よし、いっそのこと本当のことを告げよう。今日のこと、これからのことを。
「ちょうど良かった。あんたに言わないかんことあるで」
「え、何ぃ？」
悠貴はじっと私の顔を見た。私は缶チューハイのプルトップを開け、軽く二口飲んでフッと

息をつき心を落ち着かせた。
「お母さん、好きな人できてよ、さっきまでその人とデートしとったんだわ」
「へぇ、そうなんきゃあ」
そう呟く息子のリアクションは思いのほか冷静だった。意を決して告白した側からするともっと驚いてほしかった、というのが本音だ。普通なら相手がどんな人とか、どんなきっかけで知り合ったとか根掘り葉掘り聞いてくるだろう。しかし、悠貴は腕組みをして黙り込んでいる。私のことに関心がないのか、それとも内心ショックを受けて言葉を失っているのか。
「じゃ、俺からも報告するわ」
覚悟を決めた低い声。両手を組んで指の関節をポキポキと鳴らす。思い悩んだ時、彼は小さい頃からこれをやる。
「…子供が、できたんだが」
「え？」
何を言っているのか理解できなかった。冷蔵庫のコンプレッサー音が沈黙を埋める。
「昼、電話掛けても出んかったもんで、直接言お思って帰ってきた」
そうか、昼の電話はこういうことだったのか。良かった、出なくて。もしあの場でこんな話聞いていたら取り乱してデートはご破算だったに違いない。
「順番に説明してみや。相手は、誰？　いったいどうしたらそんなことになるん？　あんたまだ学生、未成年だが」
缶チューハイを一気に喉に流し込み、語気を荒げて聞いた。
「文殊。卒業してから付き合い始めたんだわ」
文殊、早渡市文殊。サッカー部のマネージャーだった子だ。遠征試合の応援に行ったときに何度か話したことがある。モデルのようにすらっと背が高くて、屈託のない笑顔が印象的だった。学年の中でも一、二を争う高嶺の花だと聞いていたが、まさか付き合っていたなんて。
「あの子も東京におるんきゃ？」
「いや、あいつは天王通の信用金庫で働いとるで遠距離なんだわ。だもんで向こうが東京来たり、俺がたまにこっち戻ってきたり」
「は？　あんた戻ってきとるんだったら家に顔くらい出しゃあ。何の連絡もせんで。…ほんで、今何ヶ月きゃ？」
「三ヶ月だと。俺も今日聞いたばっかなもんで詳しくはわからんのだに」
もう溜息しか出なかった。天国から地獄。武本さんとの楽しかった記憶がみるみる色褪せていく。夢が覚め、これから現実と向かい合わなければならない。
数日後の秋晴れ。どこまでも抜けるような青空を背景にした津島神社の赤い鳥居の美しいシルエット。その横には樹高二十五メートルの大銀杏が黄金色の葉を揺らしている。入母屋造の櫻門を潜ると、晴れ着を着た小さな女の子が両親に手を引かれ境内を歩いている。
「七五三かな？」
武本さんの呟きに私は軽く頷いた。

「うちもね、ここでやったんだに、七五三」
砂利を踏む足音に紛れて本題を切り出した。
「言うとりゃせんかったけども、私、息子おるんだわ」
「え？」
足が止まった。彼の眼が宙を彷徨っている。それは彼の思い描いていたプランが崩壊していることを意味していた。
「十九歳。東京の大学に通っていたの。だで今まではまあ、独り身みたいなもんだったけんど」
「…十九、って。信じられん」
「この間こっちに帰ってきたんだわ。子供ができたって」
遠くで赤ちゃんの泣き声が聞こえてきた。お宮参りなのだろう。私だって泣きたかった。どうしてこんな辛い告白をしなければならないのか。
「だもんで、もうこれ以上武本さんと会う訳には…」
そう言いかけた時、彼は私を強く抱きしめた。
「それ、息子さんの事情でしょ？　俺、そんなことで諦めたくにゃあで」
彼も、私も震えていた。自然と頬から涙が溢れていた。
「子供がいても、孫がいても、そんなこと関係ないがや。俺はずっと亜沙美さんを大事にするで、一緒におってょうでゃあせ」
別れを切り出すはずが、まさかのプロポーズ。九回裏ツーアウトからのサヨナラホームラン。参拝に訪れた人たちが皆私たちを見ていた。こんなところで抱き合うことになるなんて、彼も私も想定外だった。でも、全ては結果オーライだ。
そして時は流れ―。
けたたましい轟音と共に夜空に仕掛け花火が次々と打ち上げられた。私と夫は手を繋いでじっと眺めた。
「ほら、きれいだね」
隣りでは悠貴と宝珠がベビーカーに向かって話しかけている。生後四ヶ月の桃兵は怯えてワンワンと泣いている。そう言えば悠貴がこのくらいの時、私も連れてきてたっけ。連れていくにはまだ早い、と両親に叱られながら。あの頃の自分と今の自分。二十歳で母、四十にして孫。そして、四十にして二度目の妊娠。人生は、どう転ぶのか誰にもわからない。